都道府県別賞一等

# また前を向いて

大阪府　柏原市立堅下北中学校　二学年
小山　あずみ

冷たかった。寒かった。そして何となく、寂しかった。それは、まだ幼き私にとって、初めて母のいない深夜十二時過ぎだった。

ふと、暗がりの中で目を覚ますと、いつもは隣で微笑んでくれる母の横顔が、「怖い夢でも見ちゃったの。」と頭を撫でる優しく温かな感触が、そこにないことに気づいた。その代わりに、何やら頭上で話す声が聞こえ、幼いながらに危機感を覚え、勘を働かせた私は急いで立ち上がった。すると、驚くことにそこには、別の家で暮らす祖父母の姿があった。「あぁ、起こしちゃった。ごめんね。」と、落ち着いてなだめてくれる祖母とは反対に、私は驚きやら、祖父母でよかったという安心やら、母のことへの不安やらで、今にも頭がパンクしてしまいそうな状態にあった。

少しゆっくり過ごして落ち着いたのち、祖父母から母のことを聞いてまた倒れてしまいそうになった。ずばり言うと、母は流産してしまったらしい。そのころの幼い私の耳は、「流産」なんて難しい言葉、当然聞いたことがあるはずもなく、空気を読まずにただ思った通りに、「リュウザンってなに。」と訊いてしまった。祖母は少し困り笑顔をうかべたあと、「落ち着いて聞いてね。」と、ことの一部始終を話してくれた。

あいにく、その日は父が飲み会で遅い日だった。母はいつものように私を寝かしつけて寝ようと思った瞬間、お腹に違和感を覚えたそうだ。お腹下しちゃったかななんて思いながらトイレへ向かい、少し時間が経った、その時だった。突然、便座の上で激しい痛みに襲われ、多量の出血。助けを呼ぼうとするも、体が動かず、声を出すこともできず、結局唯一家の中にいた私にも、誰にも気づかれることなく、そのまま一人で苦しみ続け、ついに母は気を失ってしまった。のちに聞くと、子供のころの友達と遊ぶ様子が映像のようにして流れたらしく、いわゆるそれは走馬灯と呼ばれるものと思われ、本当に亡くなる手前だったと分かる。その後、奇跡的に予定より早く父が帰り、救急車も呼ばれ、救助隊が入り、母は助かり病院にいる。「私達は家に残ったあなたを見守りに来たんだよ、楽しみにしてくれていた妹ちゃんは、今、頑張って闘っているから、もう少し待ってあげてね。」……祖母の口調は、まるで母の子守り唄のように柔らかくとも、話の内容までは、とても柔らかいとは言えなかった。その日の夜は、母の枕と大きな不安を胸に抱きながら泣いた。

十年ほど経った今、流産を乗り越えて母がくれた、最高の贈り物の額を撫でながら、母に訊いてみた。いつかの母が私にしてくれたよう、優しく温かく撫でながら。

「流産したことを踏まえて、生命保険についてどう思う。」

と。母は、

「流産したらまず、ただでさえもうそこで限界なくらい悲しくて、苦しくて、痛くて、辛いのに、一旦それを我慢して、その上にまた辛い手術をしないといけない。しかもそれには、たくさんのお金がかかる。辛いに辛いが重なって、その上にまた金銭面でも不安がのしかかるなんて、苦しすぎるよね。でもそんな時、生命保険に入っていたから、一つ手術代への不安が軽くなった。一つだけでも私にとっては大きくて、とても助かった。まぁ本当は、保険にお世話にならないくらいに、何事もなく元気に生きられるのが一番なんだけどね！」

と笑って答えてくれた。そんな母の笑った顔を見て、こんなこと考えるなんて変かもしれないが私は、生命保険にお礼を言いたくなった。

生命保険は、金銭面だけでなく、精神面でも、大きな支えになると思う。お金の面で余裕があれば、心にもゆとりができると思うし、そして何より、頼れるものがある、支えてくれる人がいると思えるだけで、だいぶ前向きな気持ちになれると思う。リスクは何気ない日常の中に潜んでいる。もしもの時のため、背を押してくれ、私達に生きる元気を与えてくれる、そんな生命保険を学ぼうと思った。